

国際交流 *International Exchange*

2016 年 春期医学部海外医学研修報告

2016年3月、医学部第5学年(現6学年)が春休みを利用して、米国およびドイツで海外医学研修を行った。山本明希さんがハワイ大学(ハワイ州)で4週間、能崎羽慈さん、林 義大さん、米元康祐さんがマーサ大学(米国ジョージア州)で2週間、小室優子さん、鹿内彩菜さんがバーモント大学(バーモント州)で2週間、川村沙由美さん、炭谷要子さんがマクデブルク大学(ドイツザクセン-アンハルト州)での3週間の研修を終了した。

日本での実習では無かった苦労を経験しつつ多くのことを発見し、医師となって活躍することへのモチベーションを大いに高めて帰学した。この貴重な経験を友人・後輩に伝えてもらいたい。(国際交流センター長 赤井卓也記)

ハワイ大学医学研修報告(3月6日~4月1日)

ハワイでの学び多き4週間

やまもと みよんかい
山本 明希(医学部第6学年生)

海外での医学研修は入学当初からの目標でした。医学部入学前にヨーロッパで仕事をしていたこともあり、海外の医療現場に実際に身を置き日本の医療との違いを学びたいという思いが強くありました。医療体制や保険制度、文化の違いを病院内での実習や実際の診療を通して学ぶことができ、期待以上にたいへん充実した4週間となりました。ハワイ大学は大学病院を持っておらず、オアフ島内の病院および診療所にて実習をします。私はKuakini Medical Centerという116年の歴史を持つ当初日本人移民の為に建てられた病院の内科チームに加わって3週間、センターに隣接するPhysician Towerにクリニックを持っている家庭医のDr. Tokeshiの下で1週間実習をしました。内科チームでの3週間は、医学部卒業後3年目のupper resident、1年目のintern、日本の第5学年に当たるハワイ大学第3学年の医学部生と同じチームの一員として、チームが

任されている患者さんを担当しました。アメリカでは医療資源や保険制度の観点から入院日数が極端に短いため、いかに急性期を乗り切り、素早く外来でのフォローに繋げるかという事を考え、日々の診療が行われていました。急性期の患者さんも多く、コードブルーでの心肺蘇

生(CPR: Cardio Pulmonary Resuscitation)や心タンポナーデの患者さんに対しての心膜腔穿刺の見学、昏睡状態から戻らず抜管せざるを得ない患者さんの家族への説明など、毎日新たな学びの連続でした。ハワイの医学生と同じように私も担当の患者さんを受け持たせていただき実習を行いました。実際の診療の他にも、PBL方式の症例報告、上級医によるteaching roundという実際の担当患者さんの身体診察をする上での学生への直接指導など、ベッドサイドでの教育体制が充実していることに驚きました。

Dr. Tokeshiの下での1週間は、24時間オンコールで呼ばれるということもあり、1週間とは思えない程のボリュームの実習でした。患者さんは高齢の方が多く、認知症が進み、話やバイタル一つとるのも難しい方もいましたが、その方の声にもならない小さな変化に気づくことが重要だと学びました。また、今後医師としての信念にしていきたいと思ったのが、“どの患者さんを診る時もそれが最期かもしれないと思って診ること”です。茶道の一期一会に通じるものです。先生は24時間365日、自分が受け持っている患者さんの急変や、入院時、看取りの時、必ず患者さんのもとに駆けつけます。死期が近く、できる治療がなかったとしても、患者さんや家族のそばに寄り添い、そばにいたことが自分にできることとして実行されていました。私も自分の患者さんやご家族の方の助けとなり、痛みや辛さ、悲しみを少しでも軽くできる医師になりたいと思います。

この1カ月間の研修は本当に学び多きものであり、自分の英語力に関しても成長を感じることができました。ハワイという大自然に囲まれた地域医療を行う病院で、多くの手技、症例を見学し、問診や診察をさせていただいたことは、他ではできない素晴らしい経験であり、今後への大きな自信となりました。

最後になりましたが、お世話になったDr. Tokeshi, Dr. Brown、内科チームのDr. Tom, Dr. Nakatsuka、学生のDevin, Klistin, KlimentそしてPaula, Dr. Littleに心よりお礼申し上げます。



授与された研修修了書を手に

国際交流 *International Exchange*

バーモント大学医学研修報告 (3月7日～3月18日)

困難を乗り越え大きな自信に繋がった研修

しかない あや な
鹿内 彩菜 (医学部第6学年生)

この研修に参加した理由は、第1学年の時に語学留学で3週間ハワイ大学を訪れ、現地の病院や老人ホームを見学する機会があり、アメリカの医療に興味を持ったからである。臨床実習が始まると、その思いがより一層強くなった。医学研修に参加することで日米の医療の相違を体験し、将来医師となった際に広い視野を持って医療を行えるようになりたいと思い参加した。

研修では外科、剖検、病理、家庭医療 (Family Medicine) など、さまざまなことを経験したが、特に印象に残ったのは家庭医療だ。家庭医療とは乳幼児から老人までどんな年齢、性別の患者でも一手に引き受ける科のことで、かかりつけ医や家庭医といった存在である。アメリカではまず家庭医療にて受診し、入院や手術、より専門的な治療が必要な場合、大学病院などが紹介される。この仕組みは日本においても同じように思えるが、この家庭医療の医師がその1人の患者の全ての健康状態を把握しているという点で大きな相違がある。このシステムのおかげで、患者は複数の医療機関を受診する必要がないため、身体面だけではなく精神状態や家族状況といった社会的側面を含めた診療を受けることができるのである。実際に家庭医療の外来を見学して驚いたのが、医師と患者の関係が付き合いの長い友人のように見えたことだ。医師はいきなり病気の話題を振るのではなく、最近の仕事の調子を尋ねたり、ベストセラー本の話をしったりするばかりでなく、ジョークを交えながらとても親しげに会話をして

いた。いざ病気の話になると、患者が話している最中はパソコンを一切見ず、患者と向き合っ てじっくり話を聞いている姿に深く感銘を受けた。

また、婦人科のオペで da Vinci を用いた卵巣摘出術を見学できたのも良い経験だった。日本では婦人科領域での da Vinci の使用はまだ保険適応ではなく、まさにアメリカの先進医療といった感じがした。しかし、日本とアメリカの医療を比べてみると、アメリカの方が進んでいる部分や良い面も多くあったが、全体として日本での臨床実習で目にした手術や治療も多くあったように思える。あたり前かもしれないが、現代においては先進国と言われる国同士の医療格差はそうないのかもしれないと思った。

この研修に参加することは、私にとって大きなチャレンジである。慣れない土地、慣れない英語に必死に食らいついての、あつという間の2週間だったが、日本へ帰国後、改めてとても貴重な経験だったと感じている。研修中は、言葉の壁にぶち当たり、質問したいことがあってもなかなか言い出せず、自分に対するフラストレーションや異国の地での孤独感、不安感に苛まれた。しかし、木田正俊先生を始めバーモント大学病理学教室のスタッフの皆さんのサポートや、同じ研修に参加した仲間のおかげで挫けることなく、研修を終えることができたと思う。言葉が違うアメリカでもやり遂げることができたという今回の経験は、日本での実習や勉強、研修医となったときの困難を乗り越える大きな自信になると思う。

学生のうちにアメリカの医療を見るという経験はなかなかできるものではなく、このような機会を設けてくださった木田先生にとっても感謝しています。



病理学木田正俊教授の研究室にて。左から小室優子さん、木田教授、筆者

国際交流 *International Exchange*

マクデブルク大学医学研修報告 (3月7日～3月25日)

言語や習慣の違う環境の医療現場を体験した研修

すみたに ようこ
炭谷 要子 (医学部第6学年生)

将来、医師としてのキャリアの中で海外留学を考えており、まずは海外の医療を経験しておきたいと思い、マクデブルク大学での研修プログラムに参加した。ドイツでの研修を選んだ理由は、日本の医学・医療システムがドイツを基本としているためである。将来は内科を希望しているため、全身管理を学びたいと考え、腎臓・高血圧内科にて研修を行った。

研修は基本的には7時半～16時半で、ドイツの第6学年の学生につき、入院患者さんの毎朝の採血、新規入院患者の病歴聴取、身体所見・心電図をとり、回診・ディスカッションを一緒に行った。アメリカでの留学経験があったため、英語でのコミュニケーションにはある程度の自信はあったが、ほとんどの患者さんはドイツ語しか分からず、せっかく色々話しかけてくれても理解できずに申し訳ない気持ちになった。一人で患者さんのところに行くこともあったため、簡単な挨拶と「Blutentnahmen (採血)」、「EKG (ECG)」、「Schmerz? (痛い?)」などの限られた単語とジェスチャー・表情でコミュニケーションを図った。患者さんは学生の研修に協力的な人が多く、採血に失敗して落ち込んだ時に、肩を叩いて「Practice, practice. Viel Erfolg! (練習だよ、頑張れ!)」と、逆に患者さんに励まされたこともあった。

代謝・内分泌内科との合同ミーティングでは、一緒に研修に参加した川村沙由美さんと日本の医学・医療システムや糖尿病、透析の現状などについてプレゼンテーションを行った。さらに、エコー検査や透析センター、ICU、手術室の見学、そして亡くなった患者さ

んの死亡確認にも立ち会い、数時間前に亡くなった患者さんの反射消失、死斑、死後硬直の確認を現地のドクターと一緒にやる機会もあった。

ドイツの医学生は第3学年から病院研修を開始し、一人で採血や点滴ルート確保を行っており、日本の研修に比べて臨床的だと感じた。医療費が無料であることも影響してか、患者さんも学生が手技を行うことに對して寛容で協力的であり、学生もとても積極的であった。しかし、多くの患者さんを相手に手技を含めた臨床的な研修が行える一方、一人の患者さんについて深くフォローできる機会は多くないようで、ドイツの学生はそこがデメリットだと話していた。文化や習慣、制度の違いが医療現場に大きな影響を与えているということを実感し、それぞれのメリット・デメリットを学べたことはたいへん良い経験だった。

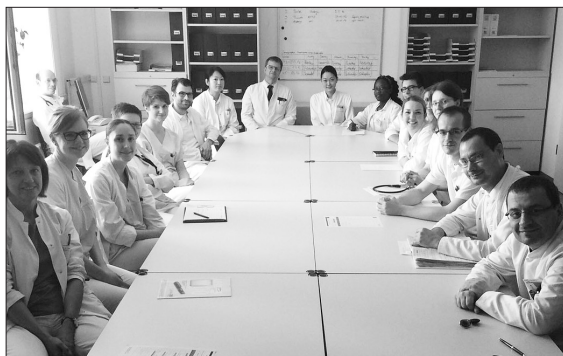
言葉が分からず、できることが限られてしまい悔しい思いもあったが、言語や習慣の違う環境の医療現場を体験できたことは、今後の人生において大きな意味を持つと確信している。

マーサ大学医学研修報告 (3月14日～3月25日)

良医になることを改めて決意した研修

よねもと こうすけ
米元 康祐 (医学部第6学年生)

日本ではまだ広く認識されていない家庭医療とER式救急の経験、そして日米間での一般的な医療の相違点の認識、英語能力の向上を目指して、マーサ大学の医学研修に参加しました。そしてそれらは全て達成され、どれも想像以上のかけがえのない経験となりました。家庭医療ではジョージア州の僻地を訪れ、医師1人で街全体の医療を支えるDr. Gattonの行う簡便な外科処置や重病患者の緊急搬送の流れを見学させていただきました。ERでは、医師の診察を見学し、簡便な問診・身体診察、CPRを経験しました。麻酔科では脳神経腫瘍摘出術のオペ室に入り、アメリカでの大胆かつ繊細な手術を目の当たりにしました。慣れない英語だけでなくスペイン語も飛び交う中、現地学生は患者の前で堂々と初診をとり、3～10数人の担当患者をもち、カンファレンスでは医師に積極的に治療法を提案していました。回診中、レジデントや医師から「君は何しに来たの?」と聞かれ、「見学です」としかな言えなかったことが悔しくて仕方ありませんでした。



研修でお世話になったマクデブルク大学のドクターとの一枚。中央右に筆者、左に川村沙由美さん

国際交流 *International Exchange*



研修先での一枚。左よりマーサ大学スポーツ医学および家庭医療のDr. Arban、林義大さん、能崎羽慈さん、筆者

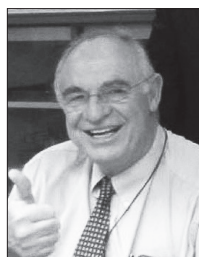
それでも自分にできることをと思い、電子辞書を片手に、やりたいことを積極的に伝え、学生である自分でもできる範囲で診察の手伝いをさせていただきました。

日米間の医療の相違点として、医療全般でみると日本と非常に類似していたように思いますが、患者に保険内容を確認し、医師が患者の待つ診察室へ行くことは、大変興味深く感じました。そして何より私が驚いたことは、アメリカの医学生の臨床実習に対する積極性とモチベーションの高さです。私から見ると彼らはもう完全に医師です。彼らは母国語が英語なので、当然のようにUpToDateを使いこなし、最先端の医学情報を常に学び続けています。また彼らは第3学年になる前にすでにUSMLEの最大の難関であるSTEP1を乗り越えているので、より一層実習に集中できているような印象でした。

この研修に参加したことで、今後も英語に携わってグローバルに医学を学び、真に患者を思い遣ることのできる良医になることを改めて決意できました。



人物往来



Ernst J. Schaefer博士／所属・肩書:Distinguished University Professor, Senior Scientist, Cardiovascular Nutrition Laboratory, Jean Mayer USDA Human Nutrition Research Center on Aging at Tufts University, Friedman School of Nutrition Science and Policy at Tufts University, and Tufts University School of Medicine Boston, MA, USA / 内容:日本ならびに中国への講演活動の一環として2015年10月27日に来学され、"New advances in ezetimibe research and its role in CVD prevention"と題して病院新館12階大会議室にて特別講演が行われた。Schaefer教授は、かの有名なフラミンガムにおける脂質分析の責任者であり、30年以上にわたり

世界の動脈硬化研究を牽引してきた第一人者である。彼が主催する研究室には2002年から梶波が、2010年からは赤尾が、それぞれ1年間留学するチャンスを得て、優れた共同研究成果(欧文論文計12編)が生まれている。

今回の講演では、「善玉」としてのHDLコレステロールの捉え方の変遷など、動脈硬化性心血管疾患予防を目指す薬物治療における最新の知見と今後の展望について、わかりやすい解説がなされた。当日は、学生ならびに教職員に加え、近隣の医療施設スタッフからも複数の参加があり、遅くまで討議が交わされ出席者にとって有意義な時間となった。

(循環器内科学 梶波康二記)